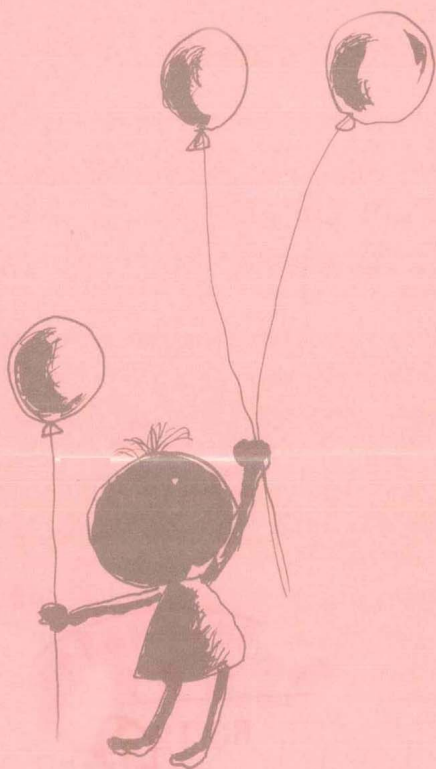


まるごと好きです

工藤直子

ちくま少年図書館 86
心の相談室





まるごと好きです

工藤直子

ちくま少年図書館 86

心の相談室

159／まるごと好きです

著者略歴

1935年台湾に生まれる。お茶の水女子大学中国文学科卒業後博報堂に入社。女性初のコピーライターとして活躍、のちフリーとなる。

詩人。著書に『てつがくのライオン』『ともだちは海のにおい』『のはらうた』などがある。

筑摩書房／1985年初版

223pp.／20cm／四六判



1985年 1月15日 第1刷発行

1985年 5月20日 第3刷発行

定価1200円

著 者 く どう なお こ
工 藤 直 子

発 行 者 ぬの かわ かく ざ えもん
布 川 角左衛門

発 行 所 株 式 ちく ま しよ ぼう
会 社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町 2-8

電 話 東 京 (291) 7651 (営業)

(294) 6711 (編集)

郵便番号101-91／振替東京6-4123

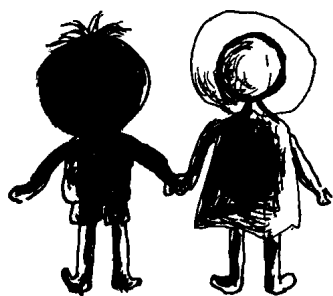
© N. Kudō, Printed in Japan

厚徳社印刷・和田製本

(分類) 8044 (製品) 04086 (出版社) 4604

乱丁、落丁本の場合は御面倒ですが、小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

まるごと好きです



7 はじめに

●

11 もらってうれしかった「友情」を
いつかだれかの心にわたす――

●

そんな「順送り」があってもいいな

22 友だちというのは、そこへ帰り
そこから出発する

●

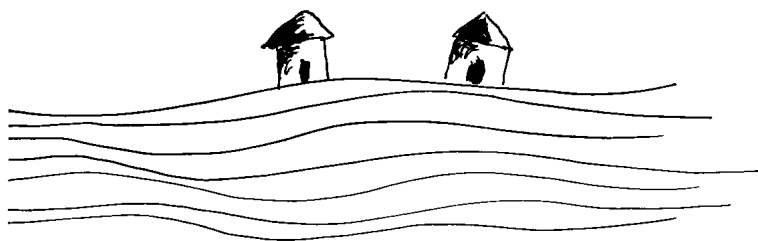
いわば「基地」のようであった

まず「まるごと好きになる」

47 はなしはそれからだ。いつのまにか

そんなふうに出会っていた

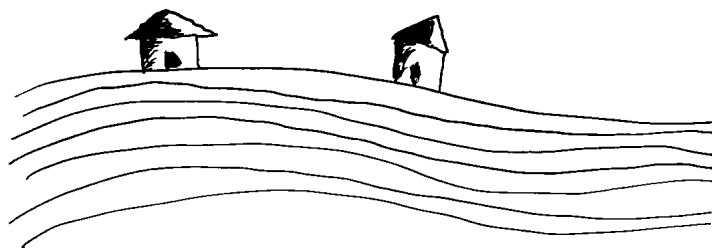
●



ひとはみな「ひとりきりの世界」をもっている
ひとりきりの世界にも
不思議な友だちがかくれているものだ

友だちづきあい「じたばた」したからこそ
友だちづきあいに「じたばた」しなくなったみたい

「あ、そうか。それもそうだね」……にこっ
このことばと笑顔が
友情のダイゴ味だった



125

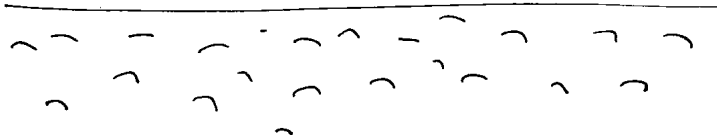
● 「くらべてみたくなる」というのは
人間の弱さだろうか強さだろうか
いろんなライバル意識があるものだ

141

● 仲良しになるというより
「仲違なかながいする」「仲直りする」という問題のほうが
友情を考えるときのポイントかもしれない

151

● 恋愛か、友情か——
いつだって話題になり
いつだって話題はつきない



176

●
おおぜいのひとのなかに自分を置いてみると
いままで見えなかった自分を発見することがある

192

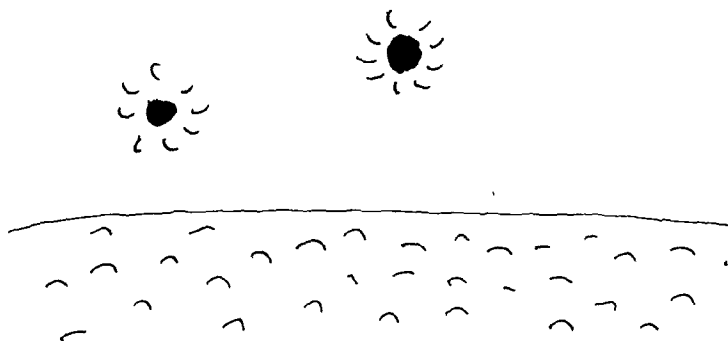
●
友情を感じる対象がひろがると
そのぶんだけ自分の世界がひろがって
おもしろいものだ

206

●
いちばん身近な自分自身――
いちばん手ごわい相手だが
いちばん頼れる相手でもある

223

●
あとがき



装幀・さし絵 佐野洋子

はじめに

「あなた、友だち多いわね」と、よくいわれる。「いろんな友だちがいるね」ともいわれる。中学、高校のころからそういわれた。今でもよくいわれる。

いわれるたびに（そうかなあ）と思う。自分では、ひとりで何かしたり遊んだりしていることのほうが多かったような気がするから。——本を読んだり、文を書いたり、昼寝をしたり、散歩をしたり、土をいじったり、竹籠たけかごを編んだり——ほとんどの時間を、そんなふうに使っていたような気がするから（友だちが多いといったって、たいていのひとと、そんなに変わらないのじゃないかな）と思っている。

三年ほど前、筑摩書房ちくましょぼうの方に、自分自身のことを書いてみないかといわれた。

「え？　自分のこと？」

「そうです。自分のことを、です」

わたしは、これまでにたくさんの方の広告のコピーを書いた。少しばかり、詩や童話を書いた。それから、もっと少しエッセイを書いた。何十年ものあいだ、たくさんの方の原稿用紙げんこうようしを使つてたくさんの方の文章を書いた。自分の考えや思いをこめて書きはしたが、自分自身について書いたことはない。

「なんでまた、わたし自身のことを？」

「それは……ですね。あなたがたくさん、引ひつ越こしているからです」

「？」

筑摩書房ちくましょぼうの方は、わたしと出会つて何回か話しているうちに、話があつちこつちに飛ぶのに気がついたそうだ。で、よくよく気をつけてみると、話題に出てくる住んでいる場所がちがう。その住んでいる場所によつて、やつてゐる仕事がちがう。だから、話題のなかに登場する友だちの人数や種類も多くなるわけだ。友だちが多いとか、いろんな友だちがいるというのは、どうもそのあたりからきているらしい。だから、わたし自身の「友だち」について書いてみないかということだった。

「そうかなあ。……それはたしかによく引つ越しするけど……。それと『友だち』という

のと関係あるのかなあ」

いわれてみて、あらためて自分が引つ越した回数調べてみた。小学校、中学、高校時代には、通して九回転校している。これはすぐ勘定できた。

小学校以前と高校以後は……と、移り住んだ家の数を勘定してみると（思い出すのに一晩かかったが）四二回転居しているのだった。調べてあらためてびっくりした。住む土地そのものが変わるものもあるが、たとえば同じ東京でも出たりはいたり、東京の西から東へ移ったり……と目まぐるしいのだ。

（新しい環境には、新しい「出合い」があるわけで。とすると、やっぱりわたしは友だちが多いほうなのかな）

しかし「友だち」って、不思議なものです。行きずりのひとと「友だち」と、どこがちがうのだろう。家族や恋人と「友だち」と、どちらがうのだろう。深くかわる「友だち」と淡いつきあいの「友だち」との、その境界線ってなんだろう。距離的にはなれていたらどうなのか、時間的につきあう機会が間遠になったらどうなのか。……そもそも、「友だち」が欲しいとか、いらないとか、「友だち」ってこういうものだとか、決められる

ものなのだろうか……。

「友だち」について書いて書いてみないかといわれて、わたしは「友だち」ってなんなのか、ますますわからなくなった。わからないままにしておくのはどうも落ち着かないものだ。

そこで、「友だちってナニ？」と、わたしの「友だち」たちに聞きながら、自分の、中学・高校時代のことを思い出してみた。それがこの本である。

さて、「友だち」って、なんだろう？

もらってうれしかった「友情」を

いつかだれかの心にわたす――

そんな「順送り」があってもいいな



「一〇代のころにね」

あるとき、いっしょに仕事をしている中村さんが話しはじめた。彼は、わたしと同年輩。
商業デザイナーである。

「そのころ、絵をかくのが好きでね、夢中になっていると、父親がかならずいうんだ。
『そんなことやっても大成せんぞ。後悔するだけだぞ』ってね。ほんと、もう、きまり

文句で、耳にタコができるほど聞かされたよ。

うつつうしいし、くやしいし、何度もうわれるうちに（おれは親になっても、こんなふうに文句をいう親には、絶対になるまい）と固く決心したんだ。そのこと、はっきり覚えてるんだよ」

彼にはいま、中学一年と高校二年の、二人の息子むすこがいる。

「ところが、なんだ。下の子がギターをやりだしてね、勉強をほっぽりだして、弾ひいてばかりいるんだが、それを見てみると、つい気になってねえ。気がつくと、自分が親にいわれたセリフを、そっくりそのまま、息子にむかっていつてるんだよ。口調くちようまで同じなんだ。……まいったよ」

彼は、そういつて苦笑した。そして（ひよつとすると、おやじも、そのまた親から、同じようなことをいわれていたんじゃないか）と、はじめて気がついたのだという。

ほかの友人からも、何度か似たような話を聞いた。

「わたしも、よくいわれたセリフ覚えてるよ」

自分の一〇代を思い出しながら、わたしは友人にいった。

「ふうん。なんていわれたの？」

あのころは、周囲のひとびとや、社会とのつながりが見えはじめて、いろんなことが、よく「わかった」気になる時期であった。とくに、「愛」とか「友情」とか「生きがい」などについて考えるのが好きだった。そして、「わかった」ことを、おとなにしゃべりたくてたまらなかった。

「たいてい、こうでしたね。『そういうけどね、世の中って、そんなもんじゃないよ』または『そんな考えは、世の中に通用しないね』……とくに多かったのは、『ま、いずれおとなになったらわかるよ』というもの」

自分は「わかっている」はずなのに、まわりのおとなは、まだ「わかっていない」という。しかも、「わかる」ためには、「世の中」というものを知らなくちゃならないし、「おとな」にならなくちゃならないみたい。

そのころのわたしは、それでは困るのであった。今の思いを、今、話したい、今、わかりたい。おとなになるまで待ってられないのであった。

「だから、わたしも、いわれるたびに思ったわよ。（将来、おとなになって、一〇代の間と話しあう機会がきたとき、『おとなになったらわかるよ』というセリフだけは、けっしていうまい）ってね」

まだ子どもだといわれるのが、よほどいやだったのだろう、そのころの気分をいまだにはっきり覚えていて。さらには（こんなに固く決心していても、もしかしたら「決心した」ということすら、コロツと忘れてしまうのかもしれない。おとなになるというのは、そういうことなのかもしれない。そうならどうしよう）と、みょうにもの悲しくなつたとまで覚えていて。

「へえ。ずいぶん思いこんだものだね。……それでどうなの？ その決心、実行できてるの？」

わたしには、一七歳になる息子むすこがいる。息子や、その友人たちと話すことが多い。ちょうど、昔のわたしと同じ立場に彼らかれはいるわけである。

「さあ、どうだろうねえ。……自分ではそのつもりでいるんだけどねえ」

自分のことは、なかなかわからないものだ。知らず知らず、息子たちにむかって、おとなの代表みたいな顔をして接しているかもしれない。

「もっとも、いまでも、あのころ考えていた、愛とか友情とか生きがいなどについて、『おとなになったからわかった』とも思えないのですね」

おとなになつてはじめてわかったこともたくさんある。世の中で通用するとか、しない